

たにしの出世

動画URL:<https://youtu.be/t8kkWNUhJZM>

日本昔ばなし「たにしの出世」

今回は日本の昔ばなし「たにしの出世」を学びながら日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部・2部・3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部→2部→3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための昔ばなしや童話のことです。「おとぎ話」の中には語り継がれてきた「昔ばなし」も、そして創作である「童話」も含まれます。

「たにしの出世」はとても有名な日本の昔ばなしです。
それでは「たにしの出世」のお話を始めます。

むかしあるところに、田を持って、畑を持って、屋敷を持って、倉を持って、なにひとつ足りないというものがない、たいへんお金持ちのお百姓がありました。

それで村いちばんの長者とよばれて、みんなからうらやましがられていました。

この長者とおなじ村に、これはまた持っているものといっちは、ふるいすきとくわとかまがいっちょうずつあるばかりという、たいへん貧乏なお百姓の夫婦がありました。

長者の田を借りて、お米やひえをつくって、その日その日のかすかなくらしを立てていました。

夫婦はだんだん年をとって、毎日はたらくのが苦しくなりました。

それでもじぶんたちの跡をついで、代わりにはたらいてくれる子どもがないので、あいかわらず夏も冬もなしに、水田のなかにつかっていたいました。

ひるやぶよにくわれながら、汗水たらしてはたらいで、それでもひまがあると、水に縁のある神様だということで、水神さまのお社に、夫婦しておまいりをしました。

「神さま、神さま、どうぞ子どもをひとりおさずけくださいます。子どもでさえあれば、かえるの子でも、つぶの子でもよろしゅうございます」

するとある日、きゅうにおかみさんは、からだじゅうがむずむずして、赤ちゃんが生みたくなりました。

「これは、水神さまのごりやくだぞ。さあ、早く神だなにお燈明を上げないか」

こういってさわいでいるうちに、おぎゃあともいわずに赤ちゃんが、それこそころりと、往来さきに、まるい石ころがころげ出すようにして生まれました。

まったくの話、この子は、石ころのようにちいさく、まるっこいので、つぶ、つぶとよばれている、たにしの子であったのです。

「つぶの子でもと申しあげたら、ほんとうに水神さまがたにしの子をくださった」

夫婦はこういって、でも、水神さまのお申し子だからということで、ちいさなたにしの子をおわんに入れて、水を入れて、そのなかでだいにそだてました。

五年たっても、十年たっても、つぶの子はやはりつぶの子で、いつまでもちいさくころころして、ちっとも大きくはなりませんでした。

毎日、毎日、たべるだけたべてあとは一日ねてくらし、声ひとつ立てません。

お百姓のおとうさんは、やはりいつまでも貧乏で、あいかわらず長者の田をたがやして、年じゅう休みなしに、かせいでいました。

「やれやれ、きょうも腰がいたいぞ」ある日、おとうさんは背中をたたきながら、地主の長者屋敷へ納める小作米の俵を、せっせとくらにつけていました。

するうち、ふとあたまの上で、「おとうさん、おとうさん、そのお米はわたしが持って行くよ」という声がしました。

ふしぎにおもって、おとうさんがふりかえって見ると、軒さきの高いたなの上にのせられて、たにしの子が日向ぼっこしていました。

おとうさんは、たにしの子が口をきくはずがない、なにかの空耳だろうとおもって、かまわずしごとをしていました。

ですが、また耳もとで、「おとうさん、おとうさん。わたしが持ってくってば」とよぶ声がしました。

口をきいたのは、やはりつぶの子だったのです。

「おとうさん、わたしはちいさいから馬を ひいて行くことはできないけれど、米俵の上にわたしをのせてくれれば 地主さまのお屋敷まで 馬をつれてってきてあげるよ」

たにしの子がずんずんそうって口をきくと、おとうさんも、おかあさんも、ほんとうにびっくりしてしまいました。

でも、この子は なにしの水神さまのお申し子だから、 きっとかわったことができるのかも しれないとおもいました。

なので、たにしの子を、三俵の米俵と米俵とのあいだに、しっかり落ちないようにのせて やって、「じゃあ行っておいで」といって、馬のおしりをたたきました。

「おとうさん、おかあさん、では行ってまいります」たにしの子は、人間の子とちっとも ちがわない言葉で、そうはっきり言いました。

そして、「さあ出かけよう。はい、しい、しい」と、じょうずに声をかけました。馬はひ ひんといないて、ぱっか、ぱっか、あるき出しました。

でも心配なので、おとうさんがうしろからそとついて行きますと、たにしの子は馬の上 から、馬方のするとおり、かけ声ひとつで、きように馬を進めて行きました。

林の曲り角や せまいやぶのなかにかかると、馬を止めて、ゆっくりあるかせます。

あぶない橋の上でも溝川のふちでも、ほい、ほい、いいながら、ぶじに通りぬけました。

そうして、ひろい田んぼ道に出ると、よくすんだ、うつくしい声で、馬子うたをうたい出 しました。

馬もいい気持ちそうに、シャン、シャン、鈴を鳴らしながら、げんきよくかけ出して行き ました。

田のなかで草をとっていたお百姓たちは、馬方のかげも見えないのに、俵をつけた馬だけ が、のこのこ、畑道のあるいて行く うしろ姿を、みんなふしぎそうに見送っていました。

だれも人のついていない馬が、ひとりであるいてきて、小作のお米を 三俵もはこび込んで きたというので、長者屋敷の人たちはびっくりしました。

さらに、米俵にはさまった小さなたにしが「お米を持ってきたからおろしてください」 と、どなっているのがわかると、よけいびっくりしてしまいました。

「だんなさま、たにしが馬を引いて お米を持ってきました」と、みんながいてさわぐの で、主人の長者ものこのこ出てきました。

そのあいだに、たにしの子はひとりではきはき、下男たちに さしずをして、お米を馬から おろして、倉に積みこませました。

そうしてすすめられると、ずんずん お屋敷のまんなかに通って、、、といたいところだ すが、じつは ころころころがって行って、ごちそうのおぜんのまえにすわりました。

「どうも、今日はおもてなしありがとうございます」 こうって、ちいさなたにしが、りっぱに、ごあいさつの口上をのべたので、長者屋敷の人たちも、びっくりしました。「いくら水神さまのお申し子でも、こんなにこうな口をきくたにしはめずらしい」 こうおもって、長者はこのたにしを、いつまでもうちの宝物にしておきたくなりました。

そこで、たにしのごきげんをとるつもりで、「たにしどの、たにしどの、お前さんをうちのむすめのむこにとりたいが、どうだね」といいました。

すると、たにしはまじめな声で、「それはどうもありがとうございます。ではうちへ帰って、おとうさんとおかあさんに話してみましよう」といって、さもうれしそうに帰って行きました。

たにしは帰るとさっそく、両親の百姓夫婦にこの話をしました。お百姓はおどろいて、長者の所へほんとうかどうか、たずねにきました。

長者もいまさら、それはじょうだんだといえないので、「ああ、ほんとうだとも。では、ふたりのむすめをよんで、どちらがおよめになるかきいてみよう」といって、まず姉のむすめをよびました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」

こういって、姉のむすめは半分もきかずに、「まあ田のなかのきたない虫っけらなんか」と、おこった声でいって、畳をけ立てて出て行きました。

そこで、こんどは、妹のむすめをよび出しました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」 こういって、妹のむすめは、「おとうさんのお約束なされたことなら、そのとおりにいたしましよう」

と、すなおにこたえたので、とうとう、たにしの子は長者のむこになることになりました。

長者のむすめは、たにしのおむこさんをだいじにして、その上、たにしのおとうさんやおかあさんにもしんせつにしてやりました。

でもこのおむこさんはあまりちいさいので、一緒に里のおとうさんおかあさんの家へ行くときには、およめさんはおむこさんをじぶんの帯のあいだに、ちょこなんとはさんで、仲よく話しながら行きました。

でも往来の人には、帯の上におむこさんがいることがわからず、およめさんがぶつぶつひとりごとをいってあるいているように見えるので、みんなふりかえって、ふしぎそうな顔をしました。

ある日、お天気がいいので、いつものように、帯のあいだにおむこさんをはさんで、およめさんは、お里の両親をたずねに行きました。

水神のお社の前までくると、たにしのおむこさんは、「どうも帯のあいだにのせられてばかりいるのも、きゅうくつになった。すこしおりて休んでいこう」と、およめさんにいいました。

「この上がきれいで、ひろくていいでしょう」と、およめさんはいって、石の鳥居の上に、おむこさんを休ませました。

「ああ、ひろい田んぼが見えて、青青した空がながめられて、ひさしぶりでいい心持だ。」

「わたしはここでしばらく日向ぼっこをしているから、そのあいだにお前は会社へおまいりしてくるといいよ」

「それでは、いそいで行ってまいります」およめさんは、それから石段をのぼって、会社におさい銭をあげて、ていねいに神さまにおじぎをして、またいそいで、石段をおりて帰って行きました。

もとの石の鳥居の所まできくと、そこにちゃんとのっていたはずの、たにしのおむこさんの姿が見えません。

鳥居の台石からころげ落ちたのかとおもって、そこらをきよろきよろ見まわしましたが、それらしいもののかげもかたちも見えません。

もしやからすが、くちばしのさきでつばんで、持って行ってしまったのでしょうか。

または、どうかしてそこらの田のなかへでも、ころがって行ったのであればいいがとおもって、およめさんは田んぼのなかにはいってみました。

春さきのこと田のなかは、水がじくじくわき出して、田の草のなかから、すみれやげんげの花が、顔を出していました。

およめさんはよそ行きのきれいな着物が、どろでよごれるのもわすれて、水田のなかへはいって行きました。

「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行った、お彼岸まいりにさそわれて、からすのくちにつつかれな、犬の足にふまれるな」

といいながら、田から田へとさがしてまわりました。

どこへ行ってもたにしは数しれずうじゃうじゃころがっていますが、それがあんまりおおすぎて、どれがおむこさんのたにしなのか、わけがわからなくなってしまいました。

およめさんは、それでもあきらめきれないので、あいかわらず、「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行った」とよびつづけました。

さがしてまわるうちに、春の日はいつか暮れて、もう田んぼのなかはよく見えないのに、からだはどろまみれになってしまいました。

すっかりくたびれて、がっかりしきって、泣き顔になって、およめさんは、深い深い どん田のなかに、いまにもずるずる 引きこまれそうになったそのとき

「これ、これ、こんな所で、いつまでもなにをしているのだね」といいながら、いつどこからあらわれたか、光るようなうつくしいわかものが、涙でかすんでいるおよめさんの目の前に、にっこりわらって立っていました。

水神さまの申し子でありながら、わけがあって、十年ものながいあいだ、たにしのからのなかに 封じ込められていたのです。

およめさんが水神さまのお社に参詣して、まごころをこめておいのりしてくれた おかげで 封じがとけ、りっぱなわかものの 姿にかわる事ができたのです。

あたりまえの人間同士のおむこさんと およめさんになったふたりは、あらためて水神さまのお社に、お礼まいりをして、めでたくうちへ帰りました。

こうして、ちいさなたにしから出世した おむこさんは、たにしの長者とよばれて、やさしいおよめさんと一緒に、末ながく栄えました。

日本昔ばなし「たにしの出世」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしを コメント欄から是非みんなに 教えてください。

今後の動画制作に 活かしますので、コメント欄から 感想いただけると 大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

